

図解 かんこうば い 勸工場に行こう!

明治初期から中期にかけて「勸工場(勸業場ともよばれた)」という店が多くできた。勸工場は、1つの建物を小さい部屋に仕切り、いろいろな商人に貸して全体を運営するもので、人が多く集まるところにつくられた。



京橋勸業場
1902(明治35)年に東京市内にあった勸工場は27で、そのうちの7つが京橋区(→p.89)にあった。右の絵はそのなかの1つ、京橋勸業場のようすを表したもの。

しょうひん のこ 商品は残りものだった?!

はじめての勸工場は、1878(明治11)年に永楽町(現・千代田区丸の内)につくられた。商品は第1回内国勸業博覧会に出された品物で、日本に古くから伝えられる美術工芸品などだった。



第1回内国勸業博覧会(→p.70)
1877(明治10)年8月21日から11月30日にかけて、東京の上野公園で開催された。殖産興業政策の1つで、技術向上のために開催された博覧会。

「食べもの以外の生活用品がそろったらしいよ。」
「朝は8時から、夜は9時くらいまで開いていたんだって！」
「みんな楽しそうに買い物しているね！」

「入場料は無料だよ。」

「舶来品は人気だったみたい。」

「民衆の遊び場でもあったんだよ。」

すみでは、店の人が火鉢にあたり、弁当を食べていることもあった。

通路は2mくらい。

商品には、品物名や価格、売主名などが記された札がつけられていた。

SAN JAS-

客が自由に手にとって見られるように、品物はずらりと並べられていた。

外国からの輸入品を売る唐物屋(洋物小間物問屋)は人気で、1つの勸工場のなかに何店も入っていた。

さっきの店のほうがいいかな…

呉服屋の座売りどちがい、土足で入り、店から店へ自由に行き来することができた。

店の前には、客を運ぶ人力車が待機していた。

入口

出口

人の流れを平等にするために、日によって入り口と出口を逆にした。入り口付近に店があるのとないのとは、売上げの差が大きかった。